

本日の前の箇所ではイエス様は郷里における宣教の後、近くの村々に行き伝道した。本日はイエス様が12弟子達を二人一組にさせて宣教に派遣させ、それに際し、イエス様はいくつかの事を事前に教えられた箇所。ここから、私たちも福音を伝える者として、イエス様の教えられた福音を伝える時の心得を共に教えられてまいりましょう。

#### I. 支え合う恵み

「また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて、彼らに汚れた霊を制する権威をお授けになった。」(7)  
これには今までの箇所との繋がりがある。イエス様が漁師のペテロ達に「わたしについて来なさい(と命じられ)。人間をとる漁師にしてあげよう(と約束された)」(1:17) そのようにイエス様は、一人ひとりを招いて12人の弟子を選ばれ、3章ではその目的を述べられた。①ご自分のそばに置くため、②遣わして宣教をさせ、③悪霊を追い出す権威を持たせるため(3:14-15)。イエス様はこれまで①「ご自分のそばに弟子達を置く」ことをなされ、イエス様の言動や御業を通して神の国(永遠の救いの恵み)について深く知る期間でした。そして時満ちてイエス様は12弟子達に福音宣教をさせ、悪霊を追い出す(救われていない人々が神を信じる事で、悪霊の束縛から解放される)権威を与えた。それは人々が悔い改め、神と共に生きるために遣わされた。

「二人ずつ遣わし」とは。特に当時、重要な事柄についての証言は二人以上の証人が必要であり、また「二人は一人よりもまさっている」(伝道者 4:9) とあるように、イエス様は二人ずつ遣わされた。それはどちらかが倒れてももう一人が支え合うことができるためであり、また、伝道は神の愛を宣べ伝える事で、お互いに主の愛で愛し合う関係によって、主の愛がそこに現われるため。パウロでさえバルナバ、ルカ、テモテ、シラスとペアになり伝道をした。一人では難しいことも協力し合うことでできることもある。私たちは必要に応じて主の宣教のために協力し合う者達でありたい。もちろん、一人で伝道する時も主は祝福し力を与えられる。

#### II. 神への信頼に生きる

「そして、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻の小銭も持って行かないように、履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。」(8-9)  
弟子達はイエス様に杖一本、履き物のほかは何も持たないようにと命じられ遣わされました。つまり、ここでイエス様は、全てを造られご支配されている王なるわたしに派遣されたのだから、衣食住のことを心配することなく、全てを備えてくださる神に信頼するよということと言われた。なぜか？弟子達はこれから神に対する信頼を人々に宣べ伝えるのに際して、自らが実際に神への信頼に生きるということを知る必要があったため。「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養ってくださいます。あなたがたはその鳥よりも、ずっと価値があるではありませんか。」(マタイ 6:26)

#### III. 足の裏のちりを払い落とす

「また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまりなさい。あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」(10-11)  
イエス様は弟子達に、どこの村でも一軒の家に入ったら、その地域から出て行くまで、その一軒の家に留まるように命じられた。なぜか？当時のユダヤでは旅人を泊め、もてなす事は大切な義務であったため、その家が福音を受け入れ、その働きに積極的に関わってくださる人たちであるなら、そこを拠点に宣教活動をする事をイエス様は勧められたということ。しかし、さらに良いもてなしを提供する家があったとしても、家を替えてはいけないとも意味する。それは貪欲にならないよということ、最初の家のご好意を軽んじてはいけないということ。キリスト者の心得は仕えられるのではなく、仕える者。なぜ仕えるのか？自分が有名になり、人々から認められたいから仕えるのか？もしそのような思いで人々にまた、神に仕えているのであれば間違い。私が入らに仕えさせて頂いている目的は、人々が神を受け入れ、悔い改め、罪と悪魔の支配から救われるため。もちろん、皆が福音の教えを聞いて信じ悔い改めるわけではない。イエス様はあなたがたを受け入れず、言うことを聞かない場所があったならその人々に対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさいと言われた。当時のユダヤ人達は異邦人の地から自分たちの地に入ろうとする時に足と衣服に付いたちりを払い落とす習慣があった。それは異邦人の地は汚れており、自分達の地はきよいと考えていたため。イエス様は当時の習慣を用いて、福音の教えに聞こうとしな

い人々に対して足の裏のちりを払い落とすように言われた。それは伝道の責任を果たしたことを示し、後は福音を聞いた人達の責任であることを目に見える形で知らせるため。冷酷な表現に感じるが、もう一度考え直して主に立ち返ってもらいたいため。その思いが根底にある。なぜなら、神は誰一人として滅びることを望んではおられないお方だから。私たちの責任は福音を伝えるまでであり、その後は神に委ね、その人が神に立ち返るように祈り続けること。決して福音を拒否している人を、見捨てることではなく、後のことは主に委ね、その人が立ち返るように祈る。その分、心を開いている人に伝えていく。イエス様も同じ。「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示3:20)。外側(イエス様の側)に取っ手はついておらず、内側(人の側)から戸を開けるのをイエス様は待っておられる。つまり、拒否した人を無理に心の戸をこじ開けるお方ではなく、人が主に立ち返るようにいつも心の戸を愛を持ってたたき続けておられる。主に委ねましょう。

#### IV. 悔い改めを願っておられる主

「こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え、多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。」(12-13)

この悔い改めとは、「180度向きを変える、心を神に向ける」という意味。つまり、悔い改めとは、心を180度変えて神に向けるということ。弟子達はイエス様と同じように罪と悪霊に縛られた人たちが悔い改めるように宣教した。私たちは福音を宣べ伝える情熱がいつの間にか弱くなり、「自分が伝えなくても、神が誰かをういて救ってくださる」という思いになってはいないか。私たちも神に救われる以前は罪と悪霊の束縛の中で苦しんでいた。しかし、私たちは自らの罪ゆえに滅んで当然の者であったが、主のあわれみによって悔い改めに導かれ、真の平安(永遠の救い)を与えられた者とされた。この恵みがどれほど尊いものであるのかをいつも覚えたい。そして、私だけではなく、愛する人々が永遠の滅びから何とか救われてほしいという願いが湧き上がってくる。そして何よりもイエス様は弟子達を用いられたように、私たちの福音宣教を用いて家族、友人、知人が悔い改めることを願っておられる。福音の大切なポイント。

1. 「罪」。原語では「的を外す」という意味。聖書でいう罪とは、神に対して背を向けている、神の御心の的から外れている状態で、神の義が無いという意味。罪の本質は反逆、反抗。けれども、ある人は「私は犯罪をしてはいないので罪人ではない」と言う。そのような私たち人間に罪が何であるか、どれだけの的外れな者であるかを教えるためにモーセの律法(正しい基準)を与えられた。人は罪を隠し、聞くのも指摘されるのも嫌い、反抗し、心を頑なにする者。そのため、人から嫌われないようにと、罪について触れずに主の福音を伝え、教会に来てもらおうとするなら、愛する人を悔い改め、救いに導く事はできない。罪を誤魔化してはいけない。罪が分からないと福音は分からない。
2. 「身代わり」。罪と悪霊に縛られ滅びに向かうが自分の力ではどうすることもできない。そのような私たちのためにイエス様が身代わりになられた。御子なるイエス様は罪と悪魔の苦しみから私たちを救うために十字架で死んでくださり死から復活された。究極の身代わり。
3. 「信仰」。真の信仰は正しい事実に基づく。それは、誤りなき神の言葉である聖書が伝えている事実。すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けることができず滅びに向かう者であったが、神の御子イエス・キリストが私たちの罪のために身代わりになられ、お墓に葬られ、三日目によみがえられ、そしてイエス様だけが罪の支配から私たちを救い出してくださるお方であることを信じるのが真の正しい信仰。以前の私たちは自らの罪ゆえに滅びに向かう者でしたが、みことばによりイエス様が私たちの罪と悪魔の支配から救い出すために十字架で死に復活されたことを知り、イエス様だけが私の救い主と信じ、その信仰のゆえに私たちは暗闇から、苦しみ悲しみ罪や悪が全くない天国で主と共に永遠に主と同じ栄光の姿に変えられ、いつも喜び生きる者と約束されている。その事実に私たちは生きている。

この大切な事実を先に救われた私たちは、何としてでも救われてほしいと願う、私たちの愛する人たちに愛を示しつつ仕える姿勢で伝えさせて頂きましょう。結果は主に委ね、主を信じ祈り続けてまいりましょう。